



G.ベルナノス：『欺瞞』の風景

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天羽, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010017

G.ベルナノス—『欺瞞』の風景

天 羽 均

ベルナノスの『欺瞞』*L'Imposture* (1927), 『よろこび』*La Joie* (1929)の二部作にはセナブル, シュヴァンス, ジャンタルなどの主人公を中心にさまざまな人物像が描かれ, とくに『欺瞞』では, これら主人公たちを取り巻く人物たちのポルトレが, 作品のあちこちにはめこまれている。これらのポルトレは, フランス文学におけるモラリスト的人間観察と描写の伝統的手法であり, そこには一つの時代, 社会を描く, すぐれてポレミックな側面があり, ドーミエの戯画に通じるものがある。それだけに描かれる人物たちは, 最初から作者によって断罪された *personnages-types* となり, 作中人物としての自律性に疑問が呈されることもある¹⁾。

他方, そのような人物によって構成される場面では, それぞれの「役割」を与えられた登場人物たちの対話は演劇的なディアローグとなり, ディアローグの合間にそれぞれの人物のポルトレが, オペラのアリアのごとく歌いあげられる。

こうして『欺瞞』第2部のゲルーのサロンが, 劇中劇ならぬ小説にはめこまれた一場の劇=ファルスとなっていることは, 前にみたが²⁾, それは同時にセナブル—シュヴァンスのドラマの背景として, 重要な意味をもつものである。ベルナノスの小説, とくに『欺瞞』, 『よろこび』における人物描写—ポルトレの問題についてはさらに稿を改めるとして, 本論では, そうした人物描写以外の部分, とくに『欺瞞』の風景描写に焦点を当ててみたい。

当初『闇』*Les Ténèbres* のタイトルのもとにひとつの作品として構想さ

れた『欺瞞』と『よろこび』は、セナブルーシュヴァンスーシャンタルの3人の人物の間で、セナブルーシュヴァンス、シュヴァンスーシャンタル、シャンタルーセナブルという二人の人物の間に順次展開されるドラマによってつながり、緊密な関係を持っている³⁾。しかし二作の題名の対照は、『闇』の小説世界の異なった次元を暗示し、『欺瞞』と『よろこび』の舞台の違いがこれを表わしている。

『欺瞞』はゲルーのサロンにみられるカトリック・モデルニストの世界を中心に、パリを舞台としている。これに対しシャンタルを主人公とする『よろこび』はノルマンディーを舞台とし、祖母、使用人たちを中心とし、父ド・クレルジュリーとパリからやってくるその客人たち（『欺瞞』の登場人物たち）が順次登場する。このパリとノルマンディーの対比は、作品のほとんどが北部フランス地方の教区を舞台とするベルナノスの作品では異色であろう。そしてこのパリとノルマンディーという舞台の違いを表わす一つの指標として、風景描写がなんらかの手がかりを与えてくれるのではないか。本論ではその一歩として、『欺瞞』における人物セナブルをめぐる風景の特徴を中心に見てみたい。

本論でいう風景描写とは、作者が情景描写としてもちいる風景、作中人物の目にうつった外界に大別できよう。そして作中人物の目にうつった外界には、いわゆる自然あるいは都市風景のほかに、室内風景も含めて考えたい。

1

ベルナノスの作品における風景描写としては、誰しも彼の最初の長編小説『悪魔の陽のもとに』^{サタン} *Sous le soleil de Satan* (1926)のプロローグの冒頭の文章を思い浮べるであろう。「ムシェットの物語」では20世紀はじめのフランスのブルジョワ化の波にあらわれる農村風景が主役であった。ポール・ジャン・トゥーレの詩作を誘う自然、その見慣れた光景こそが、ムシェットのドラマの舞台であり、ドニサンとの格闘する相手でもあった。

同じこのアルトワ地方の風景も父親と、ムシエットにはまったく異なる役割をもっている。娘の一件でカディニャン侯爵を訪れたあと、不安を押さえきれない父マロルティはブルジョワとしての彼が営々と作り上げた風景を目のあたりにして安心する。

Levant les yeux, il vit dans les arbres sa belle maison de brique rouge, les bégonias de la pelouse, la fumée de la brasserie verticale dans l'air du soir, et ne se sentit plus malheureux. (SSS pp.66, 67)⁴⁾

目をあげて、木々の間に赤煉瓦の立派な自分の家、芝生のペゴニア、夕べの空にまっすぐ立ち昇るビール醸造工場の煙をみた。もういやなことは忘れてしまった。

ムシエットにとっても、カディニャン侯爵が彼女の冒険を求める生活の英雄であったあいだは、朝の地平線が暖まり、陽炎が立ち昇り、雌牛の鼻息や、咳ばらいがすんだ空気を伝わってきて、肉桂や煙の匂いを胸いっぱい吸いこむとき、幸せであった (SSS p.67, 68)。しかし彼女にとっては父親のようにこの風景が、将来に対する不安を静めてくれるものではなかった。

Dans les jardins aux ifs taillés, sous la véranda, toute nue, qui sent le mastic grillé, c'est là qu'elle s'est lassée d'attendre on ne sait quoi, qui ne vient jamais, la petite fille ambitieuse... C'est de là qu'elle est partie, et elle est allée plus loin qu'aux Indes... Heureusement pour Christophe Colomb, la Terre est ronde; la caravelle légendaire, à peine eut-elle engagé son étrave, était déjà sur la route du retour... (SSS pp.69, 70)

刈りこまれたいちいのある庭の、むきだしの、やきつくセメントのパテの匂うベランダの下、ここで、彼女はなにかは知らぬが、決して来ぬもの

…を待ちくたびれていた、この野心に満ちた少女は…ここから彼女は出発した、そしてインドよりも遠くへ行ったのだ…クリストフ・コロンプスにとって、幸いなことに、地球は丸い、だって有名な帆船は、船首を向けた途端にもう帰途に就いていたのだから…

小説の舞台となった農村風景は、彼らの生活の強固な枠組みであり、見慣れたすべての細部が、聞き慣れた動物たちの息遣いや、バケツのぶつかる音などとともに安心の源となるし、閉塞状況を象徴するものでもあった。

2

『欺瞞』ではパリが舞台となり、そのほとんどの情景が、人物たちのディアローグを中心に進行するため、その背景は室内であり、そこで展開されるやりとりは、各界の代表者を自認する人物たちの自負にもかかわらず、その密室性に象徴されるように、閉鎖的で隔絶した世界のものである。とくにはじめにふれた第2部のゲルーのサロンを扱った章には、風景描写はまったくない。その他の章にみられる風景描写も、セナブル、シュヴァンスの人物像と密接に結びついた都市風景、室内の情景になる。

室内の情景といっても、描かれるのは室内ではなく、窓を通して見られる外界である。小説のはじめで、セナブルが、それまで保ってきたベルニションとの保護者—被保護者の関係に象徴される自己の生活の胡散臭さに疲れ、一方的に残酷な宣告をしてベルニションを追い出したあと、虚ろな眼差して壁の十字架を追うともなく見やりながら、無意識に行動するとき、突然外界が室内に入りこんでくる。

Et plus d'un sceptique eût été bien embarrassé⁵⁾ de convenir que l'interlocuteur invisible, au moins selon toute vraisemblance, c'était la croix nue pendue au mur. D'ailleurs le temps lui eût manqué

d'un examen décisif. Car s'étant avancé brusquement, par un geste aussi prompt et aussi précis qu'une parade, l'abbé Cénabre empoigna la lampe et la brisa sur les dalles.

Le clair de lune entra aussitôt dans la chambre. (IMP p. 324)

(下線, 筆者)

何人もの懐疑論者が、(セナブルの)目に見えぬ話相手が、どうやら見たところ、壁に掛かっている剃き出しの十字架であることを認めれば困惑を感じたことであろう。しかも、はっきりと確かめる時間はなかったろう。セナブル師は、不意に進みでると、身を守るかのように素早く、正確な身振りでランプをつかむと敷石のうえて粉々にした。

月の光がさっと部屋にはいりこんだ。

ペルニションを追い出したあと、自分の聖人伝に登場させた人物たちに与えていた、彼自身の虚偽の部分に対決させられたセナブルは、長い自己との対話ののち、すべてを剥ぎとられた自己の姿と対面させられる。そうした自己の姿から逃れるために、かれはしばしば窓に近づく。窓は密室で自己とむき合う人間にとって、唯一外界に向けて開かれた接点である。

Il s'approche encore de la fenêtre, appuie sur les vitres son front têtue. Le vent souffle au carrefour. La rue est vide et sonore. Il s'écarte avec dégoût. (IMP p. 331)

かれは再び窓に近づき、窓ガラスに頑固な額をおしつける。風は四辻を吹き抜ける。通りには人気はなく、風音が響いている。ぞっとして身を引く。

闇のなかでの闘いの証人に、深夜、シュヴァンスを呼んだセナブルは、この安全無害な、「女中の告解師」の前に、自己の信仰の喪失の秘密のみならず、自殺という瀆神の誘惑についてまでさらけだしてしまう。すべての秘密

を託されても、瀆神の行為の証人になることの無力さしか与え得ないでシュヴァンスが去ったあとで、セナブルは、部屋のなかを歩きまわりながら、声をだし、奇妙な笑い声を発して、自己との対話を続ける。ここでも再び窓に近づく。シュヴァンスがおいていった、僧衣の胸飾りはセナブルにあの奇妙な証人の姿を思い浮かべさせ、これをふりはらおうと、外の様子をうかがう。

C'est ainsi qu'il reposa sur la table le rabat chiffonné, maculé de taches et puant le tabac (car l'ancien curé de Costerel prisait beaucoup), puis revint vers la fenêtre, dont il ouvrit tout grands les rideaux. Mais en vain. La solitude de la rue, le ronflement du vent ramenèrent sa pensée au vieux prêtre, et il imagina son retour, à travers la ville déserte jusqu' à la chambre d'hôtel, dont il avait connu un soir la misère. (IMP p.360) (下線, 筆者)

それで彼は、皺くちゃの、煙草のしみがつき臭う（元コストレルの司祭は嗅ぎ煙草をずいぶんやっていたのだ）胸飾りを机のうえにおき、窓のほうに戻り、カーテンを大きく開けた。だが駄目だった。通りの孤独、風のうなりに老司祭のことが再び頭に浮び、人気のない町を通してホテルの部屋まで帰る彼の姿を想像した。いつかの夜たずねたみすほらしい部屋だった。

窓はここでも、セナブルを密室の闇から開放することなく、彼の孤独を確認する。その孤独は、つねに人気のない都会風景でくり返し表現される。

セナブルはフランクフルトで開かれる精神学会の閉会式で、「ルター派教会の神秘学」の講演をすることになっていたのを、務めをはたす口実でパリから姿を消すという試みに利用し、急に夜の明けやらぬパリの町を東駅に向かう。数少ないパリの町の描写がつづく⁶⁾。

朝の冷気と夜の湿気の交錯する時間のパリの町は、彼が部屋の窓からうかがい見た町と同じく、人影もなく、孤独の印をもち、見知らぬ都市で、通り

の名前のみが街角で確認されていく。

ここでは風景は『悪魔^{ドニサン}の陽のもとに』のマロルティヤムシエットにとっての見慣れたものではなく、現代の孤独を象徴するものとなっている。それはまた、ドニサンが悪魔と出会ったエターブルへの道すじを思わせる。

東駅に到着したときには、夜も明け、はじめて人間（カフェのギャルソン）の姿が描かれ、色彩が入り、ずっと暗い夜景になれてきた読者には印象的である。

Quand il atteignit le parvis de l'église Saint-Laurent, le jour était levé, l'horloge de la gare de l'Est, peinte en rose par l'aube, marquait cinq heures du matin. Sur la gauche, à grand bruit de ferrailles, un garçon de café somnolent, blême sous la crasse, levait la devanture de sa boutique. Il contempla ce passant matinal d'un regard indéfinissable. L'abbé Cénabre passa le seuil presque humblement et s'assit. (IMP 380)

彼がサン-ロラン教会の広場まできたとき、日は昇っていて、暁のばら色に染まった東駅の大時計は午前五時をさしていた。左手には、眠そうな、垢染みた青白いカフェのボーイが、がらがらと大きな音をたてて、店のシャッターを開けていた。ボーイはこの朝早い通行人を何ともいえない目付きで見つめた。セナブル師はなにかおずおずと敷居をくぐり、座った。

ばら色に染まった大時計は、夜の悪魔を追い払うと同時に、セナブルの苦難の一夜の終わりを告げる。こうしてみるとこれまでの風景描写は、エターブルへの道に迷うドニサン師の、悪魔に出会った夜の暗さと対称をなしていたことに気付かされる。ドニサン師—セナブル師、悪魔—シュヴァンス師、北フランスの夜—パリの夜の対称式で、ドニサン師はカンパーニュに戻るが、セナブル師はドイツに逃げ出す。そしてセナブル師には、町の放浪者と

の一夜が再び訪れる。

3

第2章は、セナブルの不在によって、ゲルーのサロンの負の存在があらわにされる幕間劇であり、本論のまえがきで触れたように、ポルトレが *personnages-types* たちの人形劇の舞台を見せてくれる。したがって見えるのは舞台装置だけで、風景は、セナブルの部屋でわずかに開かれていた窓としてさえもあらわれない。第2章の舞台が暗転したあと第3章は、国立図書館をでて左岸に向かうセナブルの姿を、第1章の終わりと対称をなすかたちでスクリーンに映しだす。ここでの対称は、夜明け—夕暮、出発—帰宅、そしてこのふたつの情景のあいだに経過した6カ月の時間の表わす季節の推移にみられる。

A ce moment l'auteur de la *Vie de Tauler* quittait la Bibliothèque nationale, et descendait la rue de Richelieu sous un soleil oblique, dans une poussière dorée. La ville, écrasée tout le jour par un brouillard impitoyable, aussi brûlant que l'haleine d'un four, se détendait ainsi qu'un animal fabuleux, grondait plus doucement, tâtait l'ombre avec un désir anxieux, une méfiance secrète, car les villes appellent et redoutent la nuit, leur complice. Cependant l'abbé Cénabre marchait de son grand pas égal, aussi indifférent à cette sérénité grossière qu'il l'eût été sans doute au désordre éclatant de l'après-midi, ou à la déchirante et pure haleine de l'aube, égarée parmi les pierres, pareille à un oiseau blessé. Car depuis longtemps, la pensée de l'abbé Cénabre était sans issue vers le dehors et il en épuisait la malfaisance avec une admirable cruauté. (IMP p.441)

このとき『トーレ伝』の作者は国立図書館を出て、傾いた陽射しに金色の埃のたちこめるなか、リシュリュエ街をくだっていた。一日中きつい、炉の吐き出す空気のように熱いスモッグに悩まされ、町は、想像の動物のようにぐったりとし、よりおとなしくうなり声を発し、不安げな欲望とひそかな不信で、闇をまさぐっていた。町は、彼らの共犯者である夜を呼び、しかも恐れているのだ。だがセナブル師は、大股に静かに歩きつづけた。この途方もない静けさも気にもとめずに、おそらくは正午のうるさい無秩序も、傷ついた鳥のように石の間に迷う夜明けの鋭い、すんだ息遣いも気にとめなかったろう。セナブル師の思考はもうずっと前から、外への出口をなくし、驚くべき残酷さで思考の害悪を汲み尽くしていたのだ。

リシュリュエ街をおり、パレ・ロワイヤルをへてカルーゼルの凱旋門のベンチで一休みしたのち、セヌ川へ出る。ルーブル河岸をポン・デ・ザールに向かいつつ、これまで自分に名声とスキャンダルをもたらした作家としての生活に見いだしていた充実感をなつかしむと同時に、それが永遠に失われたことを実感するが、この間河岸には人影は見えない。

Il avait encore pressé le pas, il courait presque le long du quai désert, il sentait monter le délire. (IMP 449) (下線, 筆者)

彼は再び歩みを早めていた、人気のない河岸に沿って駆けんばかりで、錯乱がのぼってくるのを感じていた。

早朝、カフェのギャルソンのシャッターをあげる音が無人の街角に響いたように、人影の見えぬセヌの河岸にタグ・ボートのサイレンが夕暮を告げる。

D'un regard furtif, jeté à droite et à gauche, il s'assura que personne ne l'avait entendu. Jusqu'au Pont-Neuf, le quai était

désert. La sirène d'un remorqueur gémit doucement, puis haussa son cri funèbre, et la dernière note déchirante, en retombant, donna le signal du crépuscule. (IMP p. 450) (下線, 筆者)

素早く左右に目をやって、誰にも聞かれていなかったことを確かめた。ポン-ヌフまで、河岸には人影はなかった。タグ・ボートのサイレンはよわく鳴り、陰気な叫びを高めると、はりさけるように最後の音を吐き出すと萎えて、夕暮の時を告げた。

東駅の大時計にさしたばら色の一条の朝日が、暗く長い夜のおわりをつけてあざやかであったように、夕日の輝きが、パリの町の建物の無数の窓を一瞬染め、熱く埃っぽい夏の日の終わりを告げるさまは、きわめて鮮やかな印象を残す。

Il fit un geste d'impuissance, et s'éveilla. Le ciel était pur et tout proche, cerné de l'orient à l'occident par une buée couleur de soufre. Les immenses platanes de la rive balançaient mollement leurs branches. Toutes à la fois, face au couchant, cent mille fenêtres allumèrent un fanal rouge, et qui sombra presque aussitôt. Alors seulement, le vent fraîchit. (IMP p. 450)

彼は力なげに動くと、われに返った。空はすんで、東から西まで、低く、硫黄色のガスに包まれていた。河岸の背の高いプラタナスはゆっくりと枝を揺すっていた。夕陽に向かった何十万の窓に、一斉に赤い灯がつき、やがてすぐに暗くなる。するとやっと風は涼しくなった。

このあとポン・デ・ザールを渡り左岸を歩き、ボナパルト街からサン・ジェルマン大通りまで⁸⁾、人気のないとおりを行くセナブルは、放浪者と出会う。ドニサンと馬喰との荒野？での出会いを思い出させるこの出会いは、第1章でのシュヴァンスとの対話とともに、セナブルの運命を決定づけるが、

夜の町が描かれることはない。

最初に見た『悪魔^{サタン}の陽のもとに』のアルトワ地方の風景は、主人公たちの生活と密着した空間＝場として、その意味を与えられていた。『田舎司祭の日記』で、アンブリクール^{アンブリクール}の司祭が、サン・ヴァアストの丘のうえから眺めた自分の教区を、濡れそぼってうずくまる獣にたとえている箇所は、現代世界を象徴するベルナノスの小説でももっとも印象的な風景描写となる。

ベルナノスの小説で、唯一パリを舞台とした『欺瞞』の風景、セナブル師にとってのパリは、教区をもたぬ司祭の名声には欠くべからざるものであったとしても、その名声の虚しさを知り、思考の出口をなくしたいま、彼自身の孤独を確認し、思考と生活の場をもたぬエトランジェであることを認識させる、点と線からなる、放浪の空間ともいうべきものになっている。それは『闇』の影の部分である。今後『よろこび』における風景描写の検討によって、さらに『欺瞞』の風景描写の意味のベルナノス小説における位置づけがなされよう。

注

- 1) このことに関する指摘は多い。
その一例は、Max Milner: *Georges Bernanos, Desclée de Brouwer 1967: Chapitre VII L'Imposture et La Joie* p.127~129.
- 2) 拙稿「ゲルーのサロン——ベルナノスの『欺瞞』についてのノート——」「独仏文学」第19号、1985.
- 3) この3組の人物の関係は、しかし同じ次元で繰り広げられるのではなく、『よろこび』で顔をあわせるジャンタルーセナブルのあいだには、根源的なドラマはもはや起こりえない。
- 4) テキストはプレイアッド叢書 *BERNANOS Œuvres romanesques*, 1988『悪魔の陽のもとに』*Sous le soleil de Satan* は SSS で表わす。以下『欺瞞』は IMP で表わす。
- 5) 密室の主人公の様子は、その本人しか知り得ず、しかも当の本人の行動は、本人にも見えないので、「もし誰かが見ていれば」というかたちでの目撃者がしばしば仮定される。こうした密室性を表わす箇所としては、以下のようなものがあ

る。

Quiconque l'eût observé à ce moment solennel eût été frappé de la netteté de son regard... (IMP p.324)

Qui l'eût vu au rouge reflet de la lampe posé loin,...(IMP p.358)

Qui eût entrevu à cet instant, par le trou de la serrure, l'homme encore imposant de vigueur et de santé, si calme par la taille, les massives épaules, le maintien fort et hardi, secoué par un ricanement démentiel, n'en aurait pu croire le témoignage de ses yeux. (IMP p.368)

- 6) Il se retrouva dans la rue, presque suffoqué par la fraîcheur du matin. L'humide haleine de la ville encore ténébreuse se dissipait lentement, baissait comme une eau morte jusqu'au sol d'où l'air neuf la repoussait mystérieusement, sans doute jusqu'au fond des caves de fer et de ciment que n'échauffe jamais la générosité d'aucun vin. (...)

Son ignorance des rues de Paris était extrême. Leur solitude à cette heure le déroutait. (...) Mais les volets de fer des devantures, les milliers de persiennes closes, les trottoirs vides, étaient comme une autre ville inconnue. Il atteignit ainsi le boulevard de Sébastopol.

Ce fut seulement à la hauteur de Rambuteau qu'il s'avisait de (...)(IMP p.378) (下線, 筆者)

A la hauteur de la rue de Rivoli, pâle de rage, il résolut de (...)(IMP p.379)

- 7) En traversant le Carrousel, il s'assit un instant sur l'un des bancs de pierre sculptés dans l'épaisseur même du mur, puis, gêné par les passants, se remit en route presque aussitôt, mais plus lentement. (IMP 448)
- 8) Il traversa le pont des Arts, s'engagea dans la rue Bonaparte, prit à droite une rue déserte, puis une autre, et une autre encore. Son mauvais rêve était tout à fait dissipé, ne l'occupait plus. Il sentait seulement le besoin d'user par la fatigue l'agitation douloureuse dont il ne pouvait se rendre maître, et il choisissait au passage, pour sa promenade sans but, d'instinct, les ruelles plus étroites et plus noires. La dernière déboucha sur le boulevard Saint-Germain, déjà désert. (IMP 451) (下線, 筆者)